

今朝も寝起きが悪かった。このところ毎朝こんな日がつづいている。

阿紀は蒲団の中から目だけを出して天井を見ていた。見上げているのに、見上げている感覚がなかった。昨夜も眠れないまま、ずっと見ていた天井である。

こんな人と思うことがつらいものだとは予想もしないことだった。寝ても覚めても、という使い古された言葉が陳腐でなかった。

弟一家の住む母屋にしかなかった電話を、阿紀の離れにも引いて貰い、ひとりになるのを待ち兼ねて掛けた最初の電話は耕之輔へだった。あのときめきは今はっきりと残っている。耕之輔の息遣いが耳元に吹きかけられるようだった。二人の間に距離はなかった。黙っていても通うものがある。あれから何度掛けただろう。それ以上に耕之輔の方から掛

かってきた。鳴る度に決まって耕之輔だった。

朝起きると、最初の仕事が彼を起こすことだった。彼の妻の存在が気にならないわけではなかったが、実感がなかった。

そんな時、突然妻の声が飛び込んできたのである。凍る思いとはああいうのを言うのだろう。

気がついた時、蛇口に向かって冷たい水を飲んでみた。じっとしてられない、血の凍る思いを知らされたのだった。

自分は何んでもないことをしているのではなからうか。人を不幸にして幸せなどあるわけもない。直ぐに山口へ飛んで行って謝らなければならないとまで思っていた。

そんな時に電話が鳴ると、胸は早鐘を打ちながら出られない。しかし、十回も鳴ると結果的にはやはり出ていた。ほとんどは耕之輔の一方的な話を阿紀が黙って聴くだけの電話だった。妻の留守を待っての電話ということ自体、阿紀には自分が許せない。

耕之輔は熱い思いを送り続ける。阿紀は身をもだえて泣きながら、結局は同じことの繰り返しだった。

しかし、その電話も一昨日の夕方を最後にばったりと止まっていた。業を煮やした耕之輔が怒って爆発し、電話を一方的に切ったのだ。明らかに喧嘩別れだった。

阿紀は泣いた。泣いても泣いても晴れないばかりか、生きているのさえ重くなってくる。「義姉さん、どうしたの？ 旅行から帰って少し変よ。疲れているのは分かるけど」

弟嫁の圭子が真面目な顔で心配した。昨日も一日、阿紀は機の前に座らなかつた。

こちらから謝れば、今なら耕之輔も許してくれそうに思えたが、それだけのことが出来なかつた。

妻が電話口に出て以来、阿紀の方からは掛けていない。受話器を握ると、また妻の声が聞こえてきそうで怖かつた。

阿紀は昨夜夢をみた。

「……よくもぬけぬけと……」

そんな声が聞こえたような気がする。

阿紀は明け方になって流しに吐いた。

目だけ出した蒲団の中で天井がいやに明るいことに気がついた。

「あッ」

と声を出して、障子を開けると初雪だった。

雪が帰ってきたことに、越後の女は蘇生する。

こんなことではいけない。しっかりとしなければと言いきかせながら、今朝の阿紀は、この初雪のはかなさを思っていた。案の定、今年の初雪は昼過ぎには跡形もなく消えて残るは雪解けのぬかるみばかりである。

阿紀はその薄汚れた斑に濡れた己の胸の中を見ていた。

根雪が来れば晒す筈の耕之輔の上布は箆笥の中に、阿紀の小千谷縮と抱き合うようにして入っている。

昼は圭子が心配して手打ちの蕎麦を運んでくれた。

「義姉さん、旅先で何があったか知らないけど、思い詰めちゃ駄目よ」

圭子には珍しく真剣に心配しているらしかつた。

「ありがとう、大丈夫よ」

金平ごぼうを入れるこの地方独特の蕎麦は阿紀をいくらか元気にした。彼女は何もかも忘れて、ともかく機に掛かっている紬を織り上げようと思った。

しかし、縦糸の間を走る横糸の杼は揺れた。

夕方から風が出てきた。ガラス窓が鳴るのも冬の来る知らせである。

珍しく弟の勝次が離れに顔を出した。

「姉さん、客が来ているけど、どうする」

「……?」

「嫌なら俺が追い返してやるけど……」

「……どなた？」

「ここに傷のある大きな男だよ」

頬を押えて勝次が言った。

「今、何処にいらっしやるの？」

「母屋にいる。姉さん、例の雪晒しの手紙よこした男じゃないのか？」

「困るわ」

声が上がって滑った。

「やっぱりそうか」

「直ぐ行くから、お茶お出ししておいて。……どうしよう、勝ちちゃん、山口からいらっしやったのよ」

「姉さん、落ち着けよ。……ほんとうにいいんだな。明日また出直させてもいいんだぜ」

「駄目よ。……困ったわ、散らかしっ放しだし」

阿紀は何を言っているのか自分でも分からない。

耕之輔が来てくれた。それだけで充分過ぎた。

勝次にも圭子にも耕之輔とのことは何も言っていなかった。ただ、祖母の上布は旅から帰って直ぐに見せてある。その時、夫婦が意味あり気に見合わせたのを阿紀は気がつか

ないふりをした。

「じゃ、待って貰っていいんだな」

勝次の脇の下から幼い姪が不思議なものでも見るように阿紀を見上げていた。

それにしても、どうして途中からでも連絡してくれなかったのだろう。阿紀は恨みがましかった。

「私の気持ちなんかちつとも分かってないんだから」

しかし、これ以上遠来の耕之輔を待たせるわけにはいかない。

土間に立つ耕之輔は夕陽を背にして一段と大きく見えた。

「来たよ」

野太い耕之輔の声が聞こえたような気がした。

「この間は御免」

阿紀はかぶりを振って厚い胸板に顔を埋めるしかなかった。人目など気にしてはいられない。

長い時間に思えた。阿紀は無言のまま手をひいて離れにさそう。

窓枠のあたりから初冬の夜が忍び込んできた。

「こんな仕事場だったんだ」

電灯をつけると、耕之輔は珍しそうに広くもない仕事場を見渡している。

「いらっしゃるのが分かっていれば、少しは片付けておきましたのに」

阿紀の項に耕之輔の熱い吐息と唇が押しつけられた。

「誰か来ます」

気配に阿紀は身をかわす。弟嫁の圭子だった。

「お義姉さん、お茶も沸いてないんじゃないかと思って」

「今沸かしてるわ」

とガス台を振り返ってみせる。

「お茶はあった？」

「バカにしないで。お茶っ葉くらいあるわよ」

耕之輔は「御面倒かけます」と丁寧に礼を言った。

「いえ、こんな田舎で何のおもてなしも出来ませんが、どうぞこゆっくり……」

と訳知りなことを言っつて、阿紀を戸口へ呼び出した。

「お食事どうする？」

「外に食べに行くわ」

「そうね、その方がいいわね」

戻ると二人の話が聞こえたように、耕之輔が言った。

「長岡のホテルを取った。荷物だけ置いて来たんだ。……食事に出られないかな」

「ええ、そうしましょう」

ガス台で薬缶が汽笛のように吹いていた。

呼んだタクシーが着いた時、もう庭は真っ暗だった。

「電気消しますから、先に出て下さい」

耕之輔が歩くと天井に頭を打ちそうだった。

稜線だけが黒く浮かぶ中空に一番星が光っている。

「行ってらっしゃい」

お茶目な姪が手を振ってふたりを見送った。

県道へ出ると耕之輔の手はもう阿紀の手を捕えていた。

長岡の懐石料理の店に電話してあった。

懐石料理の店は商店街から一つ折れた暗い住宅地にあった。

耕之輔はお銚子を二本だけ頼んだ。

「やはり違うなあ。うまい！」

阿紀はうまそうに呑む耕之輔を眺めて幸せだった。

「済みません、もう一本下さい」

阿紀が頼むのを耕之輔が手で制した。

「これで止しとくよ。おねえさん、お茶を下さい」
言って盃を伏せた。

「今のところ、約束は守ってるよ」

「ありがとう」

阿紀も素直に言えた。

果物が出て帳場に行くと、もう耕之輔が払った後だった。

「困ります。ここは私の縄張りです」

「お嬢さんが暴力団みたいなこと言っちゃいけない」

「お嬢さんだなんて、ひどい方……」

阿紀も二、三杯のお酒に上気していた。

この店から駅前のホテルへは歩いて十分ほどだった。阿紀は冷えた舗道を耕之輔の巨体にぶら下がるようにして歩いた。

「明日はどういう予定？」

「家に来て下さるんじゃないですか？」

「勿論、そちらに予定がなければだけど……」

「予定があつたって断わりますわ。でもありませんの。どうしてそんな言い方なさるの、こんなにお待ちしてたのに」

「家に着いたら電話してほしい」

「直ぐに、おやすみにならないと」

「安心して寝たいんだ」

駅前に待つタクシーに乗るとどっと疲れが出た。強く抱きしめられた余韻が節々に残っている。

何も話さなかった気がしながら、それで十分な気がした。耕之輔がそこに居るだけで満足している。

帰ったら弟夫婦に一応コトの顛末を報告しなければなるまい。面倒に思えたが大儀ではなかった。

しかし、家に着くと母屋の灯はもう消えていた。

耕之輔は待つていたように電話に出た。

「今着きました。ありがとうございます」

用意しておいた言葉を言う。この「ありがとう」には様々なものが込められている。来てくれたこと、御馳走になったこと、お酒を過ぎさない約束を守ってくれていること、抱いてくれたことも、阿紀にはみんな有り難いことだった。

「明日の朝、電話で起こして貰えるかな」

「ええ、何時に……？」

「君が起きた時に」

「それは駄目。お疲れになつて居るのに、ゆっくりおやすみにならなければ駄目よ。じゃ九時に電話します」

「そんな……。九時にはもう小千谷へ向かつてるよ」

「困ります。お掃除の時間を下さらなきゃあ」

「掃除は行つてから手伝うよ」

「あくまで恥をかかせる気ね」

たわいもない遣りとりが楽しかった。

「午前中は君のところにお邪魔するとして、午後は新潟を見たいと思つてるんだけど」

「ええ、新潟なら御案内出来ます。どんな処を御覧になりたいのでしょうか」

「君が見せたいところ」

「そんな主体性のないことでは困ります」

「そうだね。会津八一の記念館には是非行きたい。それと北方文化博物館……それに豪農の館も観たいし、出来たら弥彦山から寺泊辺りまで回りたいなあ」

「随分よく御存知じゃありませんか」

「目の前に旅行案内がある」

「まあずるい。でも、半日ではとても無理ですわ」

「それなんだよ、困るのは……」

耕之輔はそこで大きな息をついた。

「出来たら、新潟に泊まってほしいんだけど」

耕之輔は遠慮がちに言った。阿紀は一瞬たじろぎ、ためらつてからようやく冗談めかした言い方を見つけた。

「そんなことは顔を見ておっしゃるものよ」

「そ、そうだね」

「そんなに生真面目に取られても困ります。……承知しました。お供させて頂きます」
言つてから、目から火が出そうになった。

「ありがとう。実はそれが言いたかっただけ」

「ずるい方……!」

避けてきたわけでも逃げてきたわけでもない。本音を言えば待つていたことかもしれない。その日は朝冷えが厳しかった。阿紀は耕之輔の来る道を、元旦を迎える朝のように掃き清めた。

「おはよう」

圭子が寝足りた顔で珍しいものでも見るように朝の挨拶をした。

「昨夜は遅かったのね。子どもたち寝かせて待っていたのよ」

「御免なさい。もう明かりが消えてたから……」

「あの方、独身なの？」

「いづれゆつくり話すわ」

阿紀はせっかくの目を圭子や弟の中傷で汚したくなかった。

「今日もいらっしやるんでしょ？」

「午後は新潟の街を案内することになると思うわ」

「うちの人ね、あの方、何だか胡散臭いって言うの。怒らないで。お義姉さんのこと、心配してらんだから」

余計なことだ、と言いたいのをグツと抑えた。

「気持ち嬉しいけど、って言っというて」

昨夜の電話では、耕之輔は列車で来ることになっていた。つまりぬことに時間を取ってはいられない。

「じゃ私、時間があるから……」

「あら出掛けるの？」

「駅にお迎えに行くの」

圭子のあきれた顔が見えるようだ。

小千谷駅のホームをやってくる耕之輔を発見した時、傾きかけていた阿紀の機嫌は見事に立ち直っていた。

改札越しに手を振ると、耕之輔も手を上げて応えた。その人が近づいてくる。それだけで阿紀は涙ぐんだ。

「おはようございます」

朝にしては接近しすぎた耕之輔を阿紀は大きく見上げていた。顎の剃り跡が爽やかだ。

「そうだ、君の写真がなかったんだ」

耕之輔は売店でフィルムを買い求めた。

「何処を案内してくれるの？」

「小千谷で見て戴きたい処が二つあるの、いい？」

山あり河あり 暁と夕陽とが 綴れ織る

この美しき野に しばし遊ぶは

永遠にめぐる 地上に残る 偉大な歴史

小千谷が誇りとする西脇順三郎の詩碑である。耕之輔は声にして読んだ。

次に案内したのは、町のとば口にある魚沼神社の阿弥陀堂だった。三間四方の小さな茅

葺きのお堂だが、境内でよく遊んだ子供の頃から、阿紀の気持ちを惹きつけてはなさないものだった。

車を降りると、耕之輔の足はお堂へ真っ直ぐに向かっていた。何の説明もしていなかった。

正面に仁王立ちして見つめる耕之輔を、このお堂に似合うと思う。

「茅葺きの勾配と全体の量感のバランスが何とも言えないね。大地にうずくまってるようだ」

「雪が深い処ですから極端に軒が短くしてあるんだそうです」

「雪が降ると、いいだろうなあ」

「もう直ぐ降りますわ」

「それまでに身边を綺麗にして出直してくるよ」

「奥さまには何と言っていらいらっしゃったの？」

「何にも……。清水が後は任せろというんだ」

「清水さんに私感謝しなければなりませんのね」

「今朝電話したら、妻は又京都に出掛けたそうだ」

二人が新潟駅に降り立った時、駅頭は風花が舞っていた。

「雪だ」

耕之輔がつぶやくのに、阿紀の胸には来る時が来たという思いが刺した。雪の季節は越後の女には自分の季節である。

「寒くありません？」

見上げる耕之輔の背景は、灰色の点描の乱舞だった。

「先に会津八一記念館へ行っていないかな」

タクシーに乗り込むと耕之輔が訊いた。

「どうぞ」

万代橋を渡る時、横なぐりの雪が車の窓をピチピチと叩いた。ワイパーが気ぜわしく雪を払っている。

阿紀を最初に驚かせたのは会津八一の写真だった。かなり晩年のものだが、耕之輔にそっくりだった。

今までにも何度か見たはずの写真が阿紀の目に新しいものとして飛び込んできた。

「どうして気がつかなかったのかしら」

「今頃おそいよ。実はそれを認めさせたかったんだ」

「それで此処が最初なのね」

「最初、会津八一の写真を見た時、香月泰男先生に似ていると思った。そのうち段々と俺にも似ているなんて思い出して……」

「何がおっしゃりたいの？」

「いや、それだけの話……」

「香月先生に似て会津先生に似ていて、目の前のお方も案外……なのかもね」

「案外だけ余計なんじゃないか」

「申しわけありません」

軽口を叩きながら、阿紀は幸せだった。

八一の書も耕之輔の字にどこか似ていた。いや、耕之輔の字が八一に似ていた。これも阿紀には発見だった。

「この字を勉強なさったのね」

「親父の本棚にこの先生の書集や書論なんかがあつてね。のびやかで力に満ちているだろう」

阿紀にはどこまでその良さがわかっているのかおぼつかない。それよりもまた新しく見えてきた耕之輔の一面に目を大きくする思いだった。

「この書には会津八一の全体重が掛かっているだろ。陶器でこんな仕事が出来ないか何時も思うんだ」

「教えて下さい。この書だつて私にどこまで分かっているのか危なっかしいものなのです」
「そう言われても、ひと口に言えるものじゃないよ」

「この一番上の字、何という字でしょう」

「ウム、読めなければ読めなくていいんだよ」

「……？」

「何がおかしい。本当は読めないと思っっているんだろう」

「いいえ、そんな失礼なこと……」

「多分あの字は、滝という字じゃないかな。解説にそう書いてある……」

他の部屋にも誰もいないらしかった。阿紀は陳列箱の書簡を覗きながら半分ガラスに映る耕之輔を見ていた。そこには阿紀に見せたことのない耕之輔の目があった。阿紀は耕之輔に苦難の行に軀を灼いてきた僧の姿を見ていた。

この世に生まれ出ることから悲運を背負い続けてきた人だけのもつ硬さは鋼はがねの弾力を秘めてしなやかだった。

耕之輔は信濃川沿いのホテルを予約していた。ロビーは宴会客らしい人たちで賑わっている。

新潟には文化団体の会合や織りや染めの個展に出掛けてくることも多く、学生時代からの知り合いも多い。誰かに見られているかも知れないと思っただが、阿紀はむしろ耕之輔に従う自分が誇らしく胸を張りたい気持ちだった。

彼がフロントで鍵を受け取る間、阿紀は彼の真後ろにつっ立っていた。耕之輔の背中は

大きな盾である。その大きさに心を沈めていると突然、

「そちらのお客さま、こちらへどうぞ」

手空きのフロントマンから声を掛けられた。

「いえ、連れです」

耕之輔が慌てて否定している。阿紀は年甲斐もなく真っ赤になって小さな軀を更に縮めた。

ようやくエレベーターに乗り込み、ふたりだけになると、阿紀は耐え切れずに吹き出した。耕之輔もつられて笑う。

「コラ、他人の顔をしてたな」

「違うの。貴方の後ろで、私きつと威張ってたんだわ」

思い出すとまた可笑しくなって止まらない。

「困った人だ」

「御免なさい」

笑いはそれでも止まらなかった。耕之輔の後ろに誇らし気に立っている自分の姿が可笑しかった。

「笑っていると置いて行くよ」

部屋は七階だった。

部屋に入ると耕之輔は無言だった。無器用に自分の荷物を片付けている。阿紀はもてあまして窓辺に行き、そっとレースのカーテンを引いてみた。

雪はやんでいた。

阿紀の頭を十五年前の駆け落ちがよぎった。強風の万代橋で話し合った逃避行だった。

遠い日の遠い話だ。あの男は私にとって何だったのだろう。捜しても阿紀の中に何も残してはいなかった。

あれはあれで精一杯だったのだ。二十才の世間知らずの娘が自分の気持ちに正直に、懸命に生きようとした結果だった。

それが「いざり機」を相手にする十五年につながり、「いざり機」との孤独な会話が教えてくれたことも決して無駄ではなかったと思う。

気がついた時、耕之輔は直ぐ後ろに立っていた。

「大正時代の日本画を見るようだね」

音が消された世界は時代も一緒に消していた。

「寒くないかい？」

阿紀は首を振って軀を耕之輔に預けた。耕之輔の腕に力がこめられる。

「……！」

今更なにを考えることがある。すべては耕之輔に任せておけばいい。時間も思考も停

止していた。

相手の中に溶けていく自分が実感出来る。

突然の切なさが、阿紀の胸を突き、涙となって吹き出した時、息の乱れはしゃくり上げに変わっていた。何故だか分からない、どうしていいの分からない。

「どうしたの？ ……何が哀しいの？」

耕之輔が無器用に訊いたが阿紀はかぶりを振って泣き続けた。エレベーターで笑いが止まらなかったように、阿紀は泣きじやくりを止められなかった。

間近に耕之輔の寝顔があった。こちらを向いたまま寝ている耕之輔を阿紀は珍しい物でも見るように丸い眼で眺めていた。

耕之輔が間近な時はいつも目を閉じていたのだろう。間近に初めて見る耕之輔の顔だった。鼻の先を指で触りたくなる距離に耕之輔がいてくれる。

何も覚えていない。

その時、阿紀は完全に死んでいた。その後は全てが溶けて流れだけがあった。全てが予想を覆して進行しながら、予想通りだった。そして予想を遙かに超えていた。

その後の覚えもない。悦びだけがあった。

同じ思いが重なりあつてふたりを包んでいた。それは又新しい作業の出発に繋がる。

「離さないでね」

阿紀は彼の目に向かって哀願していた。

そして今、耕之輔の寝顔を眺めながら、阿紀は安心の広い海に漂っている。

阿紀は疲れていた。疲れているのに頭は冴えている。手の触れるところに耕之輔を置くこの時間を寝てなどいられない。

背中から肩甲骨の辺りにそって触ってみる。

この人の負担にならぬようにしなければならぬ。

間近な人を起こしたくなる衝動を押えて、見つめているのは耕之輔ではなく、阿紀自身の胸のうちだった。

それでも何時か眠りに落ちていたらしい。

気がつくとき、間近に耕之輔の顔があった。

「あら恥ずかしい。 ……見ていらっしやったの？」

「よく寝ていた…。起こしたかな」

返事の代わりに耕之輔の厚い胸板に顔を埋める。

耕之輔の力で無理矢理顔を上げられる。間近に見て耕之輔が言った。

「きれいだ。可愛いよ」

大きく顔を揺すられた。

「ありがとう。嘘でもうれしいわ」

「嘘じゃない」

耕之輔の唇が近づいて阿紀は再び求められた。

窓外はまだ暗かった。風も止まっているらしい。全てが止まって、世界はふたりだけのものだった。

朝のシャワーを浴びている時、突然、電話が鳴って裸の阿紀はドキリとした。耕之輔が外線と話しているらしかった。

電話はなかなか切れない。洗った髪を拭きながらおのずと聞こえてくる声に耳を傾けてしまう。

電話の相手は浅谷窯に違いない。彼の妻の顔が浮かんだ。しかし、それにしても言葉遣いが他人行儀だ。

阿紀が戻ると、耕之輔は放心したようにベッドに座っていた。その背中が痛々しい。阿紀を振り返ってニコリしたが、その笑顔がぎこちなかった。

気がつく、耕之輔の口数が極端に少なくなっていた。何かあったに違いない。

ふたりは無言のままラウンジへ降りて行った。

「何かおありになったの？」

「いや。……君には関係ないことだ」

「やはりおありになったんだわ。お願い、お話しになって頂けません？」

耕之輔はそれでも黙っていた。

「少し考えさせてくれないか。考えがまとまらないんだ」

阿紀は思い切って訊いてみた。

「奥さまに関係あることね」

返事はなかったが、それが返事になっていた。

やはりそうだったか、と阿紀の胸を冷たいものが走り抜けた。

「気にしないでくれ、と言っても無理な話だが……」

耕之輔の中でまだ何かがまとまらず葛藤しているのが阿紀にもよく分かった。

「……？」

「……妻が睡眠薬を飲み過ぎたらしい」

「……!?」

それは阿紀の予想を遙かに超えた最悪の事態だった。